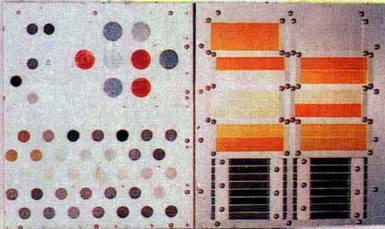


一九九九年に生まれて

シャルロット・ケルナー 酒寄進二訳

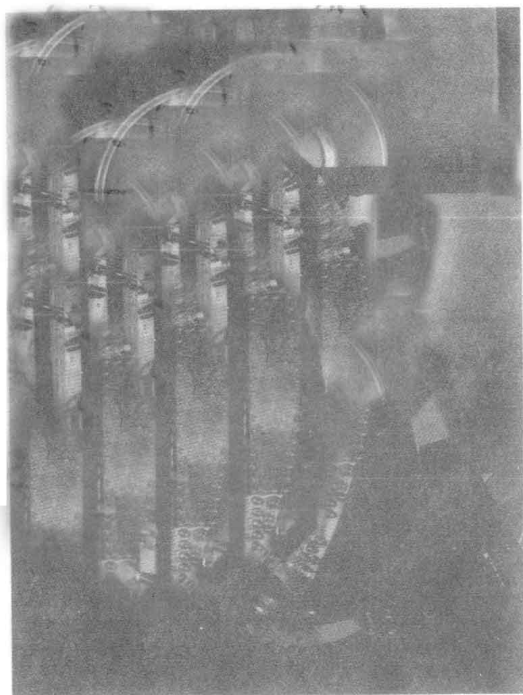


GEBOREN 1999 Charlotte Kerner

一九九九年に生まれて

シャルロット・ケルナー

酒寄進一訳



福武書店

GEBOREN 1999 by Charlotte Kerner
(c) 1989 Beltz Verlag, Weinheim und Basel
Programm Beltz & Gelberg, Weinheim. Alle Rechte vorbehalten
Japanese translation rights arranged
with Beltz Verlag, Weinheim, West Germany
through Tuttle-Mori Agency Inc., Tokyo

シャルロッテ・ケルナー
一九九九年に生まれて

さかよりしんいち
酒寄進一 訳

1992年3月9日第一刷印刷

1992年3月13日第一刷発行

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社 福武書店 〒102 東京都千代田区九段南2-3-28

電話 東京 (03)3230-2131 振替 東京 2-87372

印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

装丁・装画 虎尾 隆

©Shinichi Sakayori 1992

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-8288-4037-0 C0097

NDC940 190 216p

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

一九九九年に生まれて

手が汗ばんでいる。カールはその手を力いっぱいガラス窓に押し当てた。ガラスはいつもこんなに固く冷たかっただろうか？ カールは腕をおろし、ガラスの平らな表面についた指の跡を見つめた。ゆっくりと、小さな指の跡が消えていく。

カールもそこから消えたかった。指の跡と同じように姿を消したかった。しかしその異様な眺めに足はくぎ付けになり、身動きひとつできない。そこに立ち尽くしたまま、相手をじっと見つめる。カールと相手を隔てるのは、曇りガラスの窓だけだ。とうとう見つけた。だがいまだに実感がわかない。

ガラス窓がふたりの間を隔てていたのは幸いだ。カールは相手に触れてみたいとは少しも思わなかった。とにかく今、目になっているものをまず理解する必要がある。

カールは頭の中を整理しようとした。額に手をあてた。もう何も考えられそうにない。頭が割れそうに痛い。カールは目を細めた。目の前の光景がちらちら揺れてかき消えた。だが、目を閉じれば周りの世界が消えてなくなると信じるのは、幼い子どもぐらいのものだ。カールはすでに十七歳。事実を見据えて、すべてを理解していくしかない。

病院の鈍い物音、それが現実だ。エーテル、床の洗浄剤、しおれた花の臭い、そして血の臭い。カールは唇を血が出るほど強くかみしめていた。だが窓の向こうの相手は、何もかぐこともできなければ、カールを見ることもできない。カールは何かつかまれるものがないか探した。しかし目の前にあるのは、つるつるしたガラスだけだ。ふいに膝の力がぬけ、床がぐらぐら揺れた。

窓の向こうで仕事をしている白衣の看護婦が、カールを怪訝そうに見た。怪しまれていることに気づいて、カールは、落ち着けと自分に言い聞かせた。今、目立ってはいけけないのだ。看護婦はまだカールのことを見ている。カールは黒い文字でAUⅢとプリントされた青い見学者用の上っ張りを手で伸ばし、深呼吸をした。床の揺れはおさまった。カールはふたたび自分の両足でしっかりと立ち、前を見つめた。噛みきってしまった下唇がふるえている。

ガラス窓をうちやぶって、中に入っというか。それより、ここにあるものを、何もかもこなごなに壊してしまおうか。壊してしまえ、壊せ、壊せ。何もかも、そう、あいつのことも。

いや、気持ちを抑えなければ。落ち着くんだと、カールは自分に言い聞かせた。ゆっくりと顔を窓に近づける。熱くほてった額が冷たいガラスに触れた。

消えてしまえ！ カールは目の前の相手に向かって叫びたかった。だが言葉がでない。カールはあまりのショックに放心状態になっていた。

もうこうなったら、ガラスをこなごなに割るしかない。そしてガラスと同じように、自分も相

手もこなごなにするしかない。いや、このぞっとする光景そのものが、ガラスのようにこなごなに砕け散らなければ。

どうして搜したりしたのだろう？ 何ヶ月も、それこそ一年ちかくもの時間を費やして。カールにはわかっていた。そうするしかなかった、と。自分の責任でしたことだ。カールに選択の余地はなかった。誰一人、選択の余地を残しておいてはくれなかった。誰一人、カールが何を選択したのか尋ねなかった。そもそもカールに何が選択できただろう。いや、ひとつだけ選ばなかったものがある。窓の向こうの相手だ。

カールは、息で白く曇った窓ガラスの向こうを見つめた。間違いない。窓の向こうにいるあれが、そうなのだ。あれが、カールの母なのだ。

*

フランツィスカ・デメールは目をこすって、コンピュータの画面を暗くした。〈文書保存〉の実行キーを押してから、テキストを読み返した。ふたりの出会いは、たぶんこんなものだろう。ジャーナリストのフランツィスカ・デメールは満足だった。文頭に「再会」というタイトルをつける。なかなかいい出だしだ。単刀直入。編集長の好みにぴたりなはずだ。フランツィスカはコーヒーを一口飲んで、微笑んだ。

彼女は、もう何日も前から資料の整理にかかっていた。部屋の中はすさまじい状態だ。新

聞記事のコピーやファイルが床にうずたかく積まれ、医学関係の辞典やカセットテープ、ビデオテープ、写真、フロッピーがそこそこに積み重ねられている。フランツィスカを取り囲んでいたのは、カールの物語を書くための資料だ。手書きのもの、活字のもの、映像、音声。そしてデスクの一番上にはカールの日記。その日記を委ねられたことを、フランツィスカは素直に喜べなかった。

カールの日記は、フランツィスカを非難していた。

カールの日記は、抗議の表れだった。

カールは失踪した日に、日記をフランツィスカに送ってよこした。それからもう四週間が過ぎている。今はクリスマス、あと六日で大晦日だ。そして新年、二〇一七年が幕をあける。

フランツィスカは、年が明けるまでにはカールの物語を書き上げようと思っている。だから、息子の方・ピアンには郊外に住む友人のところへ行ってもらった。家にいれば、邪魔になるからだ。遅くとも二月の初めには記事になるだろう。早ければ早いほうがいい。カールは『ザ・ウィーク』を読んでいる。だからこそ、フランツィスカのところに来たのだ。

たぶんカールは、自分の物語を読むだろう。そしてもう一度、フランツィスカのところへやってきて、笑顔を見せてこういうに違いない。「うまく書けてるじゃないか」

フランツィスカは、カールが玄関に立っているところを想像した。ちょうどその年の一月に初めてやってきたときのように。もうはるか昔のようだ。だがわずか十一ヶ月前のことではな

い。そのとき、カールはただの見知らぬ青年だった。フランツィスカにとっては、ちよつとした記事のテーマになる程度の存在。運命的な人間だなどとは思ひもなかった。

フランツィスカは、ピンボードの写真を見た。カール・マイベルクの写真。はじめて話をした後、フランツィスカが撮った写真だ。写真の端にフェルトペンで日付が書いてある。二〇一六年一月二九日。フランツィスカには、なにかというとすぐポラロイド写真を撮って、日付を書き込む癖があった。そういう写真で、ダンボールが一箱一杯になるほどだ。

フランツィスカは、ピンボードの写真を手に取ってデスクに置いた。写真の中の青年を見つめながら、彼女は冷めたコーヒーをすすった。

カールはなかなかハンサムだ。だがあまり目だつタイプじゃない。見たところほっそりしている。鼻は形がよく、髪は栗色の巻き毛。身長は、一メートル八十二のファージアンと同じくらいでフランツィスカより頭ひとつ大きい。ふたりはクラスメートだ。だが彼の方がファージアンよりずっと生真面目で、大人びて見える。

カールの瞳はグレーだ。フランツィスカはあまり気に入ってはいない。初めて会ったときからだ。目は鋭く、人をはねつけるようなところがある。彼は誰もそばに寄せつけようとしない。例外はサラだけが、やがてその彼女のことまで突き放してしまう。

冷血カールというあだ名は、たしかに彼にぴったリだ。

カールの目は笑うことがない。たとえ口元に笑みを浮かべても、目は笑わない。彼の中で一番

表情が豊かなのは、口だ。下唇が心なしか膨らんでいるが、それでもきれいな形をしている。

カールとつき合ううちに、フランツィスカは彼の感情を目よりも口元の方でうまく読み取れるようになった。彼の感情が動くとき、口元の微妙な動きが本心を明かす。それほど彼はデリケートなのだ。だから彼の笑顔はいつも中途半端だ。写真の顔もそうだ。そもそも本気で微笑んだり、笑ったりすることがあるのかと思えるほど、彼は笑顔を見せない。

フランツィスカはぐったり疲れていた。デスクの左に寄せた紙の束の上で挑発するように鎮座しているカールの日記に、彼女は手をのばした。ためらいがちに日記を取り上げると、高価なものをおし頂くようにしつかりつかんで、そっと手元に置いた。日記をぺらぺらめくり、あるページまでくると、手のひらでなでるようにして広げた。それは、フランツィスカの部屋に来る三週間前にカールが書いたものだ。

カールの日記、二〇一六年一月六日、夕方

ぼくは誰なんだ？ どこから来たんだ？ ぼくのグレーの瞳は誰からもらったものなんだ？ 父親から？ それとも母親から？ 両親は生きているんだろうか？

ぼくは何なんだ？ 両親からもらったものは何だ？ ぼくはどこから来たんだ？

最近、そんなことばかり考えて、頭がパンクしそうだ。だから、なんとしても答えを見つけだ

さなくちや。ほとんど強迫観念みたいだ。

といつても、表面上はうまくいつてる。不幸ってわけじゃない。だけど、幸福ってなんだ？不幸ってなんだ？ ぼくはどつちも知らないだけなのかもしれない。

アンナとディートリヒは、ぼくに嘘をついたことがない。だけど最近、ふたりに異質なものが感じる。ディートリヒは単純に考えすぎる。ぼくが悩んでると、そういう年頃なんだとか、両親の家から離れたがるものとかいつて。そういつても、ほんとの両親じゃないのに。ふたりの家で暮らしているのはただの偶然。ぼくは本当の親の家を知らない。まだね。

サラと寝るようになって、ぼくは年中考えてしまう。ぼくの本当の親は、ぼくらみたいに愛し合っていたんだらうか？ ぼくが生まれたとき、ふたりはいくつだったんだらう？

ふたりは子どもを望んでいたんだらうか？ たぶん望んでいたんだと思う。さもなくば、避妊をしていたか、人工中絶をしていたはずだ。ビルだつて、あつたはずだし。

もしビルが効かなくて、サラに子どもができたら、子どもをどうするか決断しなくちゃならない。子どもを望んだとして、もちろん仮にだけど、そうしたら、ぼくはすぐにその子を手放したりできないだらうな。

ぼくの両親は、ぼくを手放すとき、どんなことを思っただらう？ どうしてぼくを手放す気になったんだらう？ ぼくの母親はひとりぼっちだったんだらうか？ それとも体が悪かったんだらうか？ どうして両親はぼくを手放したんだ？

アンナとディートリヒのおかげで、ぼくはごく普通の家庭で育った。だけど、普通っていったい何だ？　ぼくはただの普通の養子だ。ふたりになんとなく愛着はある。感謝しているっていうか、そんな気持ちもある。だけど、ふたりはすごいエゴイストだ。赤ん坊をもらうために、両親の名前を伏せておくことに同意したんだから。ルーツはばつさり切捨て。それでも雑草は枯れないってね。子どもが欲しいって願望が第一で、それがぼくであるかどうかは二の次だったんだ。ぼくにはわからない。どこから来たのか。なぜこの世に存在しているのか。

ぼくは何者だ？

本当のぼくは何者なんだ？

ぼくはみんなと違う。ずっとそう感じていた。本能的に。

ぼくが殻に閉じこもってしまうのは、そのせいだろうか？　ぼくは、本気で人を好きになれないんだろうか？　サラに対する気持ちだって、ときどき自信がなくなる。

みんな、ぼくが変わってるって思ってるんだ。そうじゃなかったら、ぼくに冷血カールなんてあだ名をつけるわけがない。

冷血カールだって？　ちくしょう!!

みんな、ぼくに矢を射かけるみたいに、そう呼ぶ。矢はぼくに命中するさ。ズキンと痛みを感じる。頭の中のどこかで。

みんなは正しいと思う。その鋭い矢と刺すような痛みとは、幼なじみみたいなものだ。それは

ぼくに属している。もうぼくの一部になっているんだ、冷血カールっていう名前は。

サラは、ぼくがかってにみんなと違うと思ひ込み、人の氣を引こうと大げさに振舞ってるだけだつていつてる。

「あなた、自分の欠点の言い訳ばかりしてるわ。自分を変えたらいいじゃない」つて、サラは年中いうけど。

変わりたいのはやまやまさ。でも、できないんだ。どうせ誰も、ぼくが変われるなんて思っちゃいないだろうし。ぼくがどういう氣持ちでいるか、みんなに説明するのは難しい。虚ろで空っぽ、孤独で疎外された感じ。

だけど、こんなのみんなただの言葉でしかない。言葉でなんて言い表せるもんじゃない。

サラだつて、ぼくがどんなにずたずたになっているかなんて、本当にはわかりっこないんだ。サラはあまりに普通すぎる。

アンナとディートリヒなんか最近やたらと、精神科医のところに行ったらかつて、ぼくに勧める。中立の立場にいる人になら、ぼくがもっと楽に氣持ちを打ち明けられると思つていんだ。ぼくは丁重に断わつたけど。

ぼくは自分でなんとかしなくちゃいけない。そう、自分でなんとかするんだ。人の助けなんか借りるもんか!!

結局ぼくの問題さ。ぼくひとりの問題なんだ!!

アンナにいわせると、ぼくはいつも手のかからない、いい子だったらしい。ぼくにはなんでも揃っていた。愛情も……。愛情だって？ 盲目の愛なら、たぶんあったさ。だけど、ぼくの人格を尊重してくれてはいなかった。

こんなことをいうのは、不当かな？ 不当だっていいなければ、いえないさ。ぼくが非難したせいで、アンナが泣こうが、デイトリヒが怒ろうが、そんなことはどうだっていい。ふたりが弁明すればするほど、ぼくは、どんどんふたりを傷つけるひどい言葉を口にするだけだ。自業自得さ。自分たちでそういう取り引きをしたんだから。子どもに黙っているなんて。

無から生まれたことを喜ぶやつなんているか？ いるわけない。

ぼくはときどき、暗い穴の縁に立っている夢を見る。足が震えるんだけど、飛ぶしかないんだ。アンナとデイトリヒがぼくを引っ張る。ものすごくきつく。そこでぼくは目を覚ます。

サラがいることが、ぼくはうれしい。ぼくがいるつてこともうれしい。ぼくはカール・マイベルク。だけど、それはぼくのほんの一部にすぎない。そうに決まってる。残りの部分を見つけださなくちゃ。十七にもなっていないぼくには、簡単じゃないだろうけど。

今度は、そう、今度だけは自分の人生について自分で決断するぞ。

アンナとデイトリヒには、つべこべいわせない。ひとりてやり抜いてみせる。それもすぐに。どうやったらいいか、ぼくにはわかっているんだ。

フランツィスカをカールの問題に引っぱり込んだのは、息子のファービアンだった。ファービアンがカールを家に連れてきたのだ。どんよりとした寒い一月の火曜日だった。天気の良いもあって、フランツィスカは機嫌が悪かった。ファービアンは、見知らぬ青年を書斎に押し込むようにして入ってくると、にやにや笑いながら、いつもの生意気な口のきき方をした。「こいつ、ク拉斯メートでさ。カール・マイベルクっていうんだけど、『ザ・ウィーク』の売れっ子記者フランツィスカ・デーメルさんに一目会いたいっていうんで、連れてきた。なんか聞きたいことがあるんだった。それも、ひとりだけで。そんじゃ、よろしく！」そしてさっさと部屋から出ていった。

フランツィスカはむっとした。記事を書いている最中に邪魔されるのが嫌いなのだ。しかし一時の衝動にかられて、その青年を丁寧に、だが有無をいわさず部屋から追い出すようなことはしなかった。青年を一目見たとき、好奇心が湧いたのだ。

カール・マイベルクは、どこか変わっていた。フランツィスカは一目見てそのことに気づいた。フランツィスカには、異常なことを嗅ぎつける嗅覚がある。だからこそ今、彼女はカールの物語を書いているのだ。

はじめのうち、ふたりはなかなか打ち解けなかった。どちらかといえば、ふたりの間には不信感があった。ふたりが仲良くなり、親しい口をきくようになったとき、カールが打ち明けたことがある。フランツィスカを打算的だと思っていた、と。

カールにはびっくりするほど鋭いところがある。フランツィスカも認めるところだ。ふたりが初めて会ったとき、フランツィスカがいつどんな反応をし、その後目付きがどう変わったかを、カールは鋭く感じ取っていたのだ。

初めて訪ねてきたとき、カールはどうやって書類やデータを手にいれたか、フランツィスカに正確に話してきかせた。フランツィスカの気を引いたのは、カールに誕生日がふたつあったということだ。さっそく嗅覚が働いた。

「これはいい記事になる！」

はじめのうち、フランツィスカは確かに打算的だった。だが今では、悲しいまでの怒りを覚えている。たしかに記事はいいものになる。だが、酷い話でもあるのだ。

ふたつの誕生日、そこからすべてが始まった。だからフランツィスカも、そのことをまず記事にするつもりだ。ふいに、なかなか思い付かなかったタイトルが頭に浮かんだ。

フランツィスカは、キーボードを正しい位置に置いてキーをたたいた。「再会」のシーンの後、すぐに最初の回想場面をつなげることにした。そうやって三部構成で肉親捜しを書くことにしたのだ。

*